

角田市の阿武隈川河川敷にある角田滑空場を舞台に、グライダーを活用した地域おこしが本格化している。自らグライダーを操縦し、世界大会に挑み続ける齋藤岳志さん(三三)が地域との接点となり、滑走路などの施設整備を進めてきた。

(角田支局・齋藤秀之)

「グライダーの魅力は何でしょうか。」

「動力付きの飛行機はエンジンが回っていれば飛行できます。でも、グライダーは上昇気流をつかまなければ自力で飛ぶことはできない。風を読み、つかんだ時の達成感が一番大きいですね」

「角田滑空場を活用する理由は。」

「安定した上昇気流があり、周囲に豊かな自然が残っているのが、グライダーの飛行に最適の環境です。従来、県航空協会は仙台市の陸上自衛隊霞目飛行場を借りていましたが、民間施設と違っていろいろと制約がありました。協会では今後、格納庫を整備するなどして角田滑空場に活動拠点を移す考えです」



「地元住民が支援団体にちにとっても喜び。角田「スカイネット角田」を組織するなど、地域との連携も密ですね。一度は体験飛行をしてみたいぐらいの気持ちです。」

「地元の商工会青年部などに助けられてここまでできました。イベントや体験搭乗で地域おこしに協力できるのはわたしたちです」

飛ぶ楽しさ伝えたい

「十月には日本初のグライダー曲芸飛行大会も開かれました。」

「台風の影響で大幅な日程短縮を迫られたものの、千人以上の方に世界トップレベルの曲技を披露することができました。妙技に見とれる観客」

「今後の抱負を教えてください。」



「さいとつ・たけし 1972年東京都生まれ。3歳の時に仙台市に転居する。東北学院大卒。宮城県航空協会幹事。学生時代にアメリカでライセンスを取得し、グライダー飛行の全国大会で優勝経験も。99年に角田市に移住して現職に就く。」

宮城県航空協会
角田事務所長

斉藤 岳志さん(32)